

東北地方太平洋沖地震と869年貞観地震の関係

津波堆積物による貞観地震の推定浸水域と東北地方太平洋沖地震の浸水域

停端午之節。○廿六日癸未。陸奥國地大震動。流光如晝。隱映。頃之人民。呻吟伏不能起。或屋仆。壓死。或地裂。埋。毀。馬牛。驚奔。或相昇。踏。城。壕。倉。庫。門。樓。墜。壁。須。落。斷。瀾。不知其數。海口。嘯。吼。聲。似。雷。霆。雲。霧。涌。滿。浪。一。漲。長。忽。至。城。下。去。海。數。十。百。里。洶。々。不。辨。其。涯。淡。原。野。道。路。毀。爲。泥。泥。乘。船。不。進。登。山。巖。及。瀕。死者。十。計。資。產。而。釋。殆。無。子。遺。焉。○六月丁亥朔。十一日丁酉。月。次。神。今。食。祭。遣。親。王。公。卿。於

国立図書館Web
『日本三代実録
(貞観十一(869)年
五月二十六日)』より

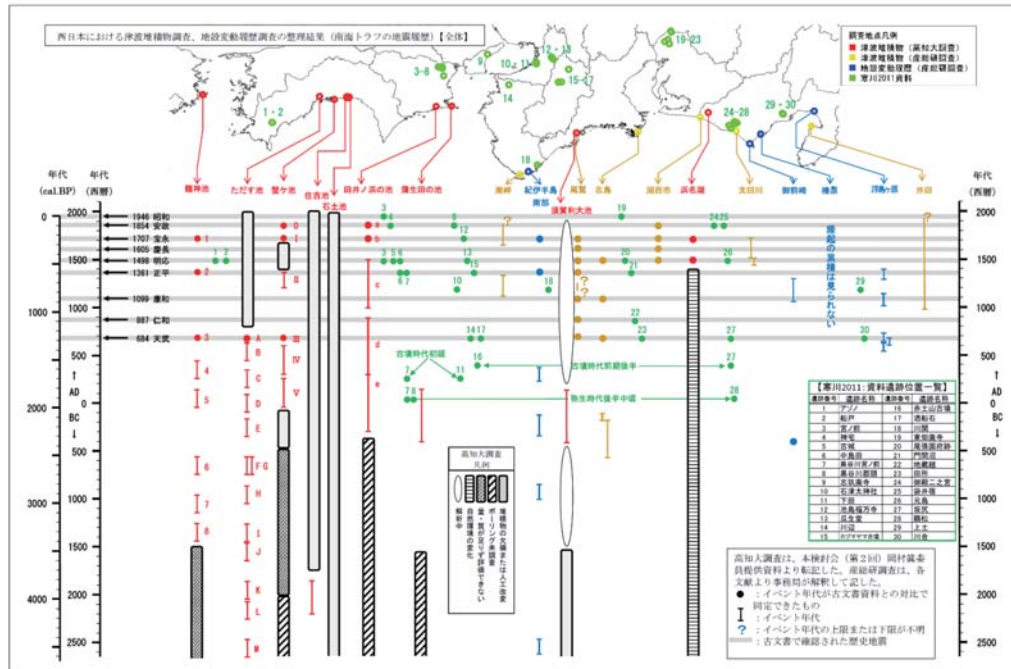


日本地震学会Webより

1498年明応地震津波に関する調査研究

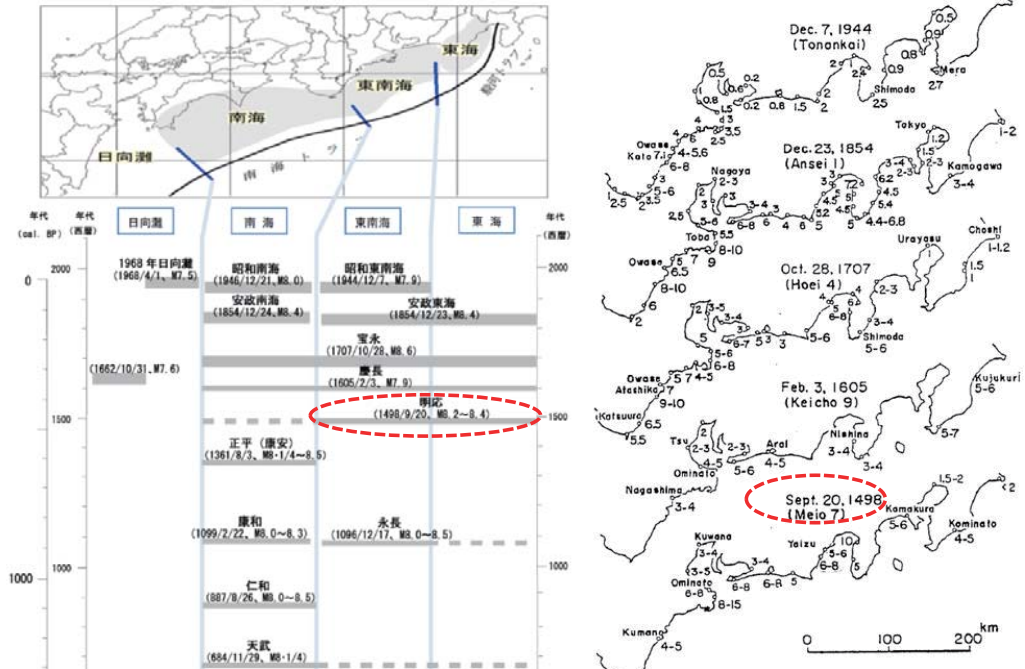
名古屋大学減災連携研究センター エネルギー防災(中部電力)寄付研究部門
浦谷 裕明

過去の南海トラフ沿いの巨大地震・津波



内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会」より

明応地震・津波(明応七(1498)年八月二十五日)



羽鳥(1985)より

明応地震・津波(明応七(1498)年八月二十五日)

明応津波によって・・・

- ① 鎌倉の大仏殿(標高14m程度)が流失？
- ② 浜名湖口が切れ外海と繋がった？
- ③ 日本三津の一つである安濃津が壊滅・荒廃？

(東北地方太平洋沖地震後には・・・)

- ④ 伊豆西岸(戸田)で、地元伝承から津波高30m超？

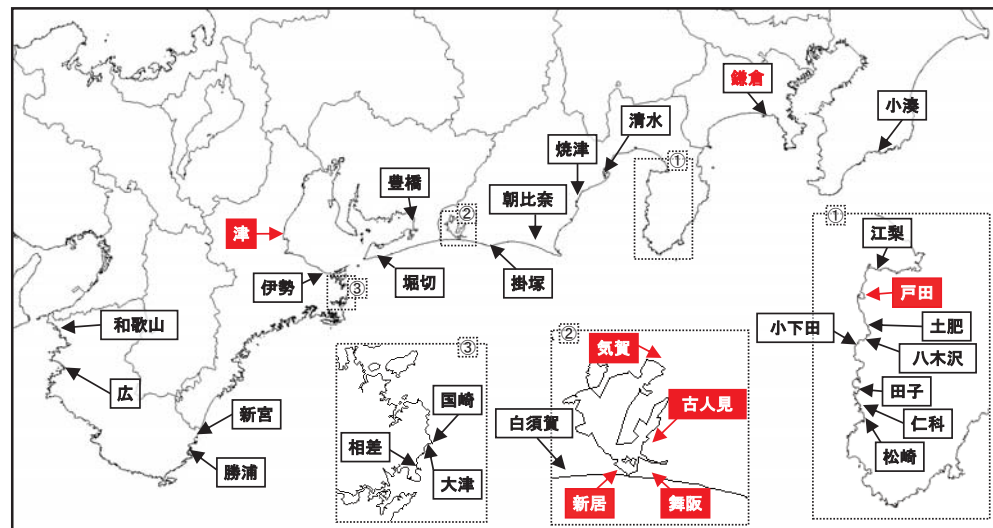
↑ 宝永、安政東海、昭和東南海では、このような劇的な出来事は知られない。



明応津波は他の南海トラフ地震津波に比べてとりわけ大きな津波であったのか？

これまでの調査地点

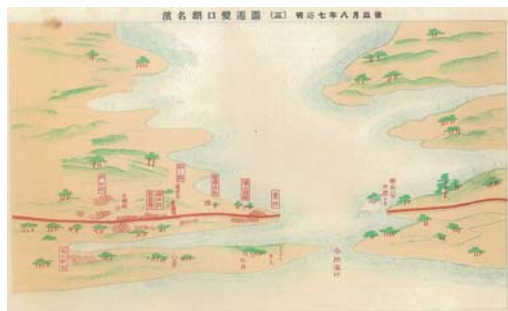
- これまで、愛知・静岡・三重の東海地方を中心に、主に明応地震津波に関する調査(文献調査、聞き取り、現地確認など)を実施。
- さらに明応地震津波の震源・波源像について検討するため、東端や西端の神奈川・千葉・和歌山についても調査を実施。



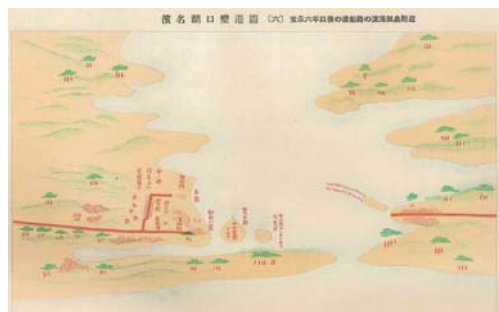
② 浜名湖口が切れた？



貞観四(862)年頃(『浜名湖口の沿革史』より)



明応七(1498)年八月以降(『浜名湖口の沿革史』より)



宝永六(1709)年以降(『浜名湖口の沿革史』より)



現在(『電子国土』より)

② 浜名湖口が切れた？

○今切形成に関する史料状況について

【東榮鑑】(増訂・大日本地震史料第一巻より)

明應七年八月廿五日、諸國大地震、遠州前坂ト坂(橋カ)本ノ間ノ川ニ津波入り、一里餘ノ渡シトナル、是ヲ今切ト號ス

【足利季世記】(新居町史 第四巻 考古・古代中世資料より)

(永正七年)八月廿七日廿八日兩日ノ間ニ遠江国エ大浪オヒタタシク来リ陸地忽ニ海トナル今ノ今切ノ渡ト申ハ是也、

【皇年代略記】(新居町史 第四巻 考古・古代中世資料より)

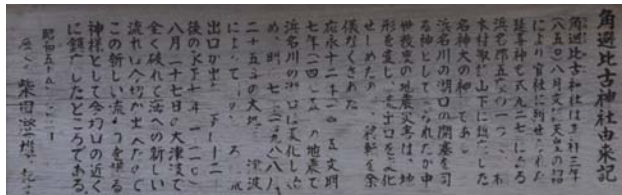
(永正七年)八(月)廿七(日)遠州今切崩出云々。

【編年小史】(増訂・大日本地震史料第一巻より)

明應八年六月十日 遠州橋本甚雨大風、海涌湖溢、濱居皆漂蕩、湖海之間、驛路亦所没、因成舟航、是日今切渡、驛宿曰新居

②浜名湖口が切れた？

○角避比古神社について



角避比古神社は嘉祥三年（八五〇）八月文徳天皇の詔により官社に列せられた延喜式神名式九二七にある浜名郡五座の一つで、橋本村諏訪山下に鎮座した名神大の神社である

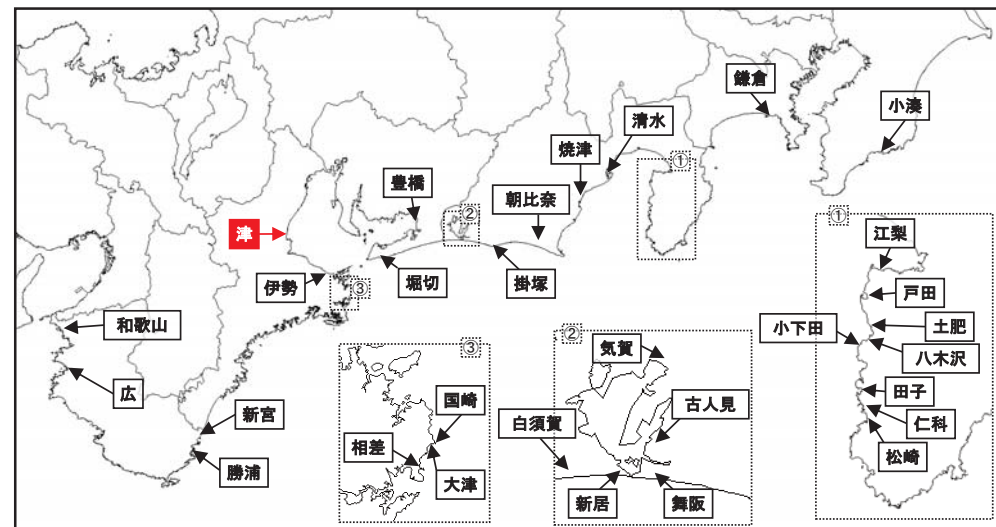
浜名川の湖口の開塞を司る神として祭られたが中世教度の地震災害は、地形を変じ、流出口を変化せしめたので、移転を余儀なくされた

応永十二年（一四〇五）文明七年（一四七五）の地震で浜名川の湖口は変化し始め、**明応七年（一四九八）八月二十五日**の大地震、津波によって別のところに流出口が出来、更に十二年後の**永正七年（一五一〇）八月二十七日**の大津波で全く破れて海への新しい流れ口今切が出来たのでこの新しい流れ口を護る神様として今切口の近くに鎮座したところである。



・今切は**明応津波**のみに
よって形成されたと言
い難い。
・その後の災害も要因。

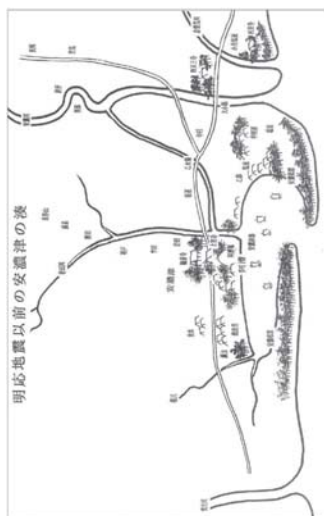
③安濃津が壊滅・荒廃？



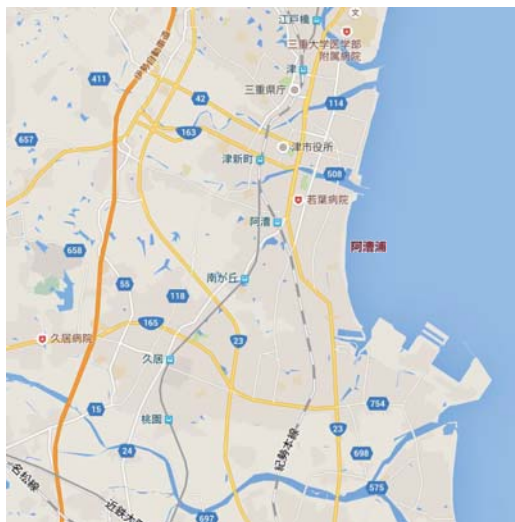
③安濃津が壊滅・荒廃？

○安濃津と松原

- ・津は、中世以前、砂嘴(松原)によって囲われた天然の良港で、三津七湊の一つとして繁栄。
- ・(明応地震の24年後)大永二(1522)年に安濃津を訪れた連歌師・宗長は、「此津十余年以來荒野となりて、四・五千軒の家・堂塔跡のみ。浅茅・蓬が柚、誠に鶏犬はみえず、鳴鴉だに稀なり」と記している。



『安濃津の湊は陥没したのか』より



③安濃津が壊滅・荒廃？

○安濃津の被害記事

【勢陽考古録】（江戸時代成立、津坂東陽編）
明応三年五月七日、同七年六月十一日両度の大地震に安濃津十八九町**沈没**と申伝ふ。安濃松原此の災に海となりけるとなん

【大日本国誌】（明治期成立）
恵日山観音寺 安濃郡津大門町ニ在リ 往昔ハ今ノ津興村辺ニ在リシカ、明応三年庚寅五月七日・七年戊午六月十一日ノ地震ニ、土地海中に**沈没セルヲ**以テ、今ノ地ニ移ル

【勢陽集記】（津市史より）
安濃の松原、古來名所と聞侍れとも今はなし。明応年中の地震以前には津町と海との間に古りたる松原有と云、其の**松原入江深く船かゝり又往來の便り宜き湊なり**けるに地震の時破却して松原と共に跡方もなく湊も遠浅に替り待ると云々

【雑集記】（津市史より）
安濃松原は海岸と共に十八九町**海底に崩れ**、松の木末は海面に浮草の如く、洪水後七十余年まで**海中に松木多く残れり**

③安濃津が壊滅・荒廃？

○西来寺について

・津に残る古い寺院として、西来寺がある。

『西来寺縁起』

真盛上人(円戒国師・慈攝大師)は御年48才の延徳2(1490)年初めて安濃津に御巡化になり、大門観音寺で説教された。上人の教化に感動した人々が上人の止住を願い、**阿漕の海岸近く**に一字を建立し上人に奉った。上人はこの寺を西来寺(せいらいじ)と名付け不断念仏の道場とされた。同年4月龍神寄進の浄財と巨木で佛殿を建立した。



③安濃津が壊滅・荒廃？

○西来寺の変遷について

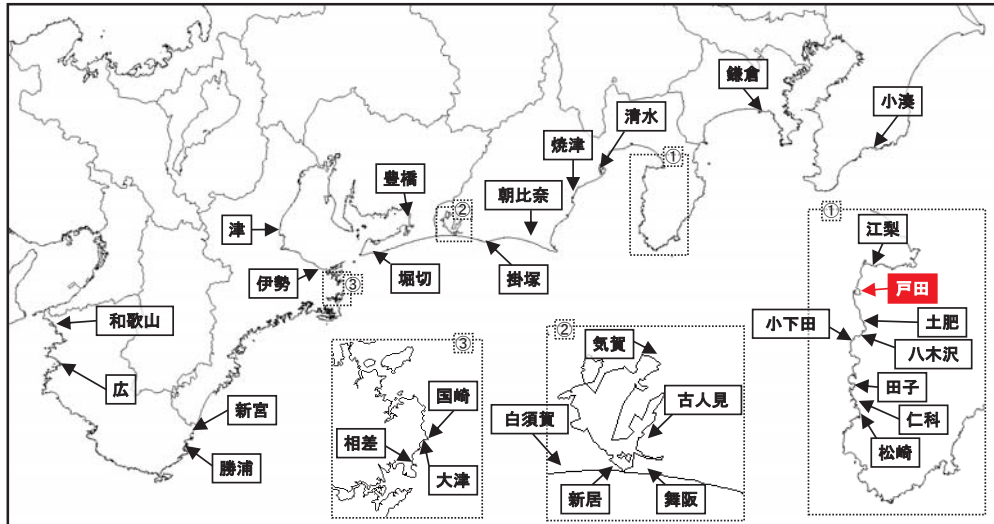
- ・明応地震後の移転【①→②】は、地震津波被害を受けての移転。
- ・移転先【地点②】は現在の津柳山郵便局前(西来寺塚。現標高2~3m程度の低地)
- ・その後の移転【②→③】は、織田信包が城主となり町を現在の城下へ移転したため。
- ・その後戦乱により焼失し、現在地【地点④】を城主から下附され移転【③→④】。『真盛上人と西来寺』より



<移動要因>
地震津波
戦略
戦乱

◆安濃津の衰退は政治的要因も！

④戸田で、津波高30m超？



④戸田で、津波高30m超？

日本経済新聞
2016年5月13日(金)

春割 電子版・新聞 お申し込み

Web刊 速報 ビジネスリーダー マーケット テクノロジー アジア スポーツ マネー・ライフ 朝刊・夕刊 Myニュース 人事ウォッチ

トップ 紙面運動 連載 社説・春秋 特集 映像 FT オピニオン 就活 超ワック 米大統領選

検索

記事 株価

津波、静岡で海拔36メートル超到達か 室町時代の地震
2011/9/16 9:53

室町時代の1498年に発生した大地震「明応東海地震」で、古文書の記録や伝承から、静岡県沼津市で津波が斜面を駆け上り海拔36メートルを超える地点まで達していた可能性があることが16日までに、東京大学地震研究所などの調査で分かった。東日本大震災では、岩手県宮古市の斜面を39.7メートルまで津波がさかのぼったとする調査報告がある。

静岡県は東海地震の津波被害の想定として1854年の安政東海地震を目安としているが、東大地震研の都司嘉宣准教授は「明応東海地震の津波の高さは安政東海地震の3~4倍あり、防災指針を見直すべきだ」としている。

国の地震調査研究推進本部によると、明応東海地震は東海沖から四国沖の海底にある溝状の地形「南海トラフ」沿いに起きた大地震。マグニチュード(M)は8.3程度で、津波が紀伊半島から房総半島まで達したとされている。

都司准教授によると、寺院が記録した古文書などにより浸水場所を調査し、現地でも測量。明応東海地震では、沼津市戸田の集落の「平目平」と呼ばれる地点まで津波が到達したとの伝承があり、海拔を測定すると36.4メートルだった。平目平という地名も、当時の津波でそこまでヒラメが打ち上げられたという言い伝えに由来するという。

主な市場指標 世界の市況一覧>

日経平均(円) 5/13 大引	16,412.21	-234.13	-1.41%
NYダウ(ドル) 5/12 終値	17,720.50	+9.38	+0.05%
ドル(円) 5/13 16:23	108.67-68	-0.25円高	-0.22%
ユーロ(円) 5/13 16:23	123.20-24	-1.05円高	-0.84%
長期金利(%) 5/13 14:47	-0.115	+0.000	
NY原油(ドル) 5/12 終値	46.70	+0.47	+1.01%

日経平均について (銘柄一覧) Quick

日ウーマニクス プロジェクト

女性の働き方を変えるのは、私です。

日本経済新聞社は、女性が今よりもっと活躍できる環境づくりを応援します。

④戸田で、津波高30m超？

○戸田の伝承について

【弥吉じいさん続・戸田村のむかしばなし】（著：梅原弥吉）

「平目ヶ平」

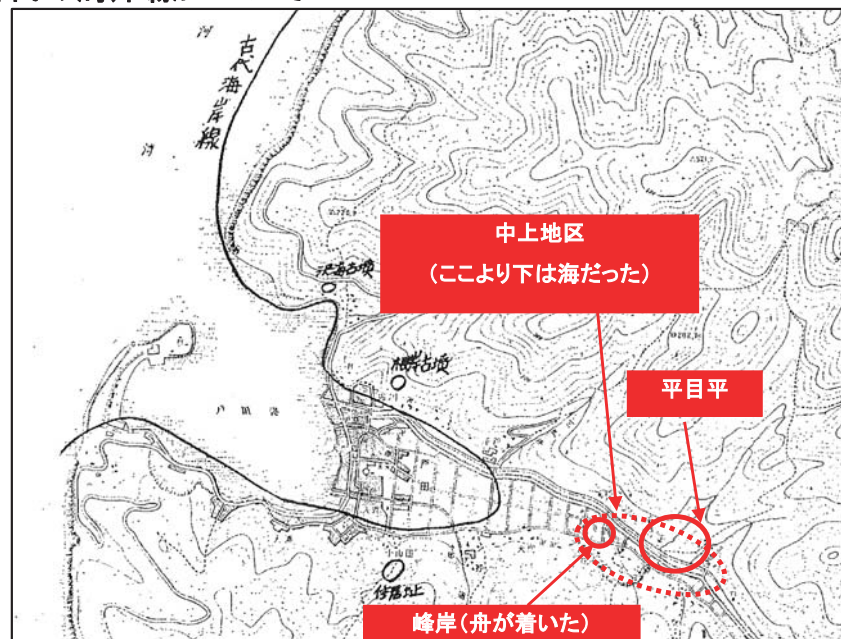
戸田村中上区椎木の西側にある小さな小山、その上にひろがる千坪ばかりの平を「平目ヶ平」と言う。（中略）古老から聞いた話によると、「何百年か何千年か前の大昔に地震があり、大津波が起り、ここに大量のヒラメがあがった…」ことから、平目ヶ平と言うようになったとのことでした。また、古老達は、「上の峰岸というところに昔は船が着いたこと」や「中上の下の方をママ（水深の深い所をいう）と言い、今でもママという人がいること」などを教えてくれました。

「戸田村は大昔、海だった？」

古老の話によると、戸田村は大昔、中上から下の方は海だったそうで（中略）中上の空坂あたりを「舟箱」と言い、そこで舟を作っていたそうです（中略）こんな想像も成り立ちます。戸田の山から、砂や岩石・泥などが戸田港に流れ込み、そして現在の戸田村ができた……。このように見ると、中上の下あたりは海だったという古老の話も（中略）、平目ヶ平や中上の舟箱の話も（中略）納得がいきます。

④戸田で、津波高30m超？

○古代の海岸線について



『戸田村埋蔵文化財 戸田の遺跡』より 22

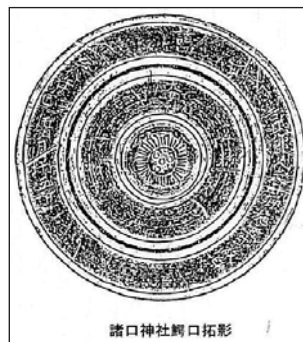
④戸田で、津波高30m超？

○諸口神社

- ・戸田湾を囲うように伸びる御浜岬の先端には諸口神社が鎮座する。
- ・由緒として、応永8年(1402)3月の再建を伝えている。
- ・この再建の際に奉納された鰐口(鉄製の円盤)を残している。



諸口神社より戸田を望む



諸口神社鰐口拓影

『戸田村の社寺』より

◆明応津波による被害があったとしても、鰐口を失わない程度。⇒30m超はありえない！

まとめ: 明応地震津波について

- ①鎌倉の大仏殿(標高14m程度)が流失？
⇒明応年間の津波は、段葛に達するような津波。
⇒相模トラフを震源とする関東地震の可能性。
- ②浜名湖口が切れ外海と繋がった？
⇒明応地震津波だけで今切が形成されたとは言い難く、
その後の水害等も要因となっている。
- ③日本三津の一つである安濃津が壊滅・荒廃？
⇒地盤の変動(沈下)による影響が大きく、津波による壊滅的な被害とは考え難い。
⇒安濃津の荒廃は、内海ではなくなったことや、政治的要因も。
- ④伊豆西岸(戸田)で、地元伝承から津波高30m超？
⇒(平目平は)明応津波ではない。